

性暴力を考える

読者から

上

「性暴力を考える―被害者から」の連載に対し、九日までに百六十四通の投書をいただきました。うち約四十通が被害者からの手紙でした。まず被害者の声を紹介します。

「小学生のとき痴漢にあっ
て以来、私は自分のことを人
間じゃないみたいと感じま
す。道具みたいだと思っ
てしま。傷ついたことは痴漢の
ほかに二つあります。警察で
詳しく言わなければならな
かったこと。母に『あんたがほ
んやりしてるから』と言われ
たこと。悪気なく出た言葉だ
ろうけど、一生忘れません。
私は人間として生きてい
るつもりでも男の道具として道を
歩いている。死んでしま
い
たい気分です」
(高校生)

「九歳のとき男に性暴力を
受けました。父が警察に通報
しましたが、警官は犯人と同
年代の男ばかり。『胸をもま
れてどんな気持ちでした』な

被害者の手紙40通

は嫌だと抵抗をやめると、男
は逃げました。私はあのと
着たコート、髪飾り、もう身
につけることができませ

「十八歳の時、帰宅途中に
後から男が飛びかかってき
た。『声を出すと畑に連れ
ていかれた。『やめて下さい』
と、か細い声で言うのがや
つた。足がすくんで逃げられ
ず。ズボンを下ろされた。何
が起

「二年ほど前、私も性暴力
を受けた。友達だと思っ
た男からだった。まさかと思
った。恐怖で体が動か

「五年ほど前に、被害の経
験があります。相手をどう
うするとは考えませんでした
た。日本では抵抗したと立証
しなければ強姦と認められ
ないといっていましたし、下
品な司法関係者によるセカ
ンドレイプはまっぴらだっ
たから。犯人たちは軽べつ
だけです。それよりも、犯人
を野放しにする無知で理
解のない周囲に腹が立つ
た。性とは何か、私に落ち
度はなかったのか、どうし
たらこの心の傷を克服でき
るだろうか。十年後、初
めて話したのは、友人で
した。それから一年後に父
に、その後、母に、何百
時間も話し合っただけで
ない。自分も、死ぬこと
ばかり考えていた。自分
を責め、死ぬことばかり
考えていた私は、この時
やっと一つ目のハードル
を越えました。『罪を憎
んで人を憎まず』そう思
えるようになったのは、
その後、初めて男の人に
心を開いてからです。人
間になれるには教育が
ないと思うようになりました。
間違った社会は自分たち
で変えなくちゃ。一緒に
がんばりましょう」
(17歳学生)

足すくんで逃げられなかった 抵抗しろだなんて法律は空論だ 何百時間も話し合っ て傷克服

「だれにも言えませ
んでした」
(年齢不明)

「早く終わってほしい、
早く終わってほしい、そ
う思うことしかできな
かった。わ
かりますか」
(17歳学生)

「終電で帰る途中、痴漢に
あいました。肩を押し
えられ、スカートに手
を入れられ、『助けて』
と叫んだら首を締め
られました。相手の顔
をしっかりと見ました。
しかし、力の差は歴然
です。殺されるの

「二十年前、家出した生徒
を捜しに行った先で三人
の男に暴行されました。
あまりの理不尽さ、屈辱
、悲しさ、警戒心
がなかった」
(20代)

「大柄な男で、ばか力
で私を押しえた。『や
めて』という声もかす
れ声になった。泣いて
いる私を見て男は、『
そんなに嫌だったら逃
げたら良かったの』と
言った。驚いた。しほ
らくの間、その男の車
と同じ車を見ると、恐
怖で息が止まりそうだ
った。こんなにも傷
つくとだとは知らな
かった」
(20代)

「望まない相手に性
の対象にされることは、
例えば『ささいな痴漢
でも、ものすごく不快
です。小学生のとき初
めて痴漢にあいました。
まっ黒な怒りと悔しさ
は今も忘れられません。
私はその場面をよ

「幼いころから性暴力の
恐怖にさらされてきまし
た。親は親類。親には話
せませんでした。小
学生の私は『十年
間考えてみよう』と思
いました。性とは何か、
私に落ち度はなかった
のか、どうしたらこの
心の傷を克服できる
だろうか。十年後、初
めて話したのは、友人
でした。それから一年
後に父に、その後、母
に、何百時間も話し
合っただけでなく、自
分も、死ぬことばかり
考えていた私は、この
時やっと一つ目のハ
ードルを越えまし
た。『罪を憎んで人を
憎まず』そう思える
ようになったのは、
その後、初めて男
の人に心を開いて
からです。人間に
なるには教育が
ないと思うよう
になりました。錯
誤った社会は
自分たちで
変えなく
ちゃ。一緒に
がんばり
ましょ